

矢島 渚男 選

雪しんしんもつ目の見えぬ雪鬼
 【評】雪を丸め南天の赤い実を目に はめて雪鬼を作る。でもたちまち雪 が降り積もって、目が隠れてしまっ た。今年ほどんな卯年にならないう。 マフラーの長さは二人分だけと

【評】万葉集に恋を「孤悲」とした 万葉仮名がある。いま孤独な若者が 多い。老人も連れ合いを「くして」孤 悲」を嘆く人も多い。後半部は機知 ある表現で面白い。
 おおひかぎぎのほどの青空大根引く

【評】日本海側は雪、太平洋側は晴 天の日が続いた。この覆い被さるこ う表現は適切だ。しかしどこか孤 独感があり淋しい。雪も欲しい。 むくむくと真綿を着込み生きる意地 愚痴はそとまで熱燗は熱いうち
 福島市 齋藤 スイ
 名古屋市 山守 美紀
 聖樹立つ仮設住宅集会所
 栃木県 あらみひとし

用もなき人ふつと来る十二月
 八王子市 齋賀 勇
 投稿の文字の傾く寒さかな
 和泉市 山崎 文恵
 用水に鯉飼ふ郷や冬に入る
 出雲市 石川 寿樹
 石段を十まで数え七五三
 仙台市 三井 英二

宇多喜代子 選

昏く来て明るく去りし時雨かな
 【評】時雨の本意をとらえた句。さ っと来て、さっと去る時雨を「昏く」と「明るく」で的確に表現した。下 五の「かな」も効果的。
 山並の真上うつかぬ冬の雪
 埼玉県 竹本 遊児

【評】他の季節の雪とちがいで、冬の 空では凍えたようにかたまってる動か ない。つらなる山並みという大きな 景のひろがる句。
 冬うらら上皇さまの誕生日口
 東京都 東 賢三郎

【評】上皇様のお誕生日は、一九三 三年十二月二十三日。寒い時期だが 「冬うらら」という言葉が、その日 を寿ぐ気持ちをよく表している。 単純な言葉で多くを語っている。
 十二月赤城は今日も端然と
 太田市 阪本 和夫

冬 海白鬼のとき浪頭
 那珂市 綿引多美子
 歳晩やゴールド免許返納す
 前橋市 豊嶋 秋生
 白鳥の立山よりも白きかな
 富山市 吉野 恭子
 爺婆に大き過ぎたる鏡餅
 東大阪市 土屋 鉄男
 冬籠思ひ思ひに好きなこと
 福山市 引地うづじ
 降る雪や千枚の田を一枚に
 横浜市 小林 千秋

正木ゆう子 選

右側の腎臓で聞く除夜の鐘
 【評】元氣な時には内臓を意識しな い。恙があつて初めて内臓の在処 を意識し、身体と「コミュニケーション」 が出来るようになる。今や右の腎 臓のことまでわかる作者。すごい。
 お湯割の蜜へ至福の柚子しぼる
 愛知県 諸星 光恵

【評】柚子や酸橘・臭橙などの酸 っぱい柑橘は、秋冬の楽しみである。 やや大袈裟な至福がいい。日常の 小さな幸せほど確かなものはない。 一生に乘るは七台冬の屋
 相模原市 内田 真己

【評】自動車のことだろう。数字の 七が、季節から北斗七星を連想させ る。ちなみにわが家はいま一台目。面 白い角度からの一生の見方である。 抱き心地良き白菜を選びけり
 伊勢崎市 中野 千秋

初日出づ渚とんでは狐の子
 津市 中山 道春
 水餅の浮かぶがごとく沈みをり
 神戸市 藤生不二男
 初雀のんびり生きることはなし
 倉敷市 中路 修平
 よく見れば立浪草の掃り花
 町田市 枝沢 聖文
 怒濤凌ぐ車艦島の虎落宿
 広島市 藤城 元
 寒桜まばらに咲きて樹木葬
 武蔵野市 相坂 康

小澤 實 選

寒いから痛いに変わる寒さ感
 【評】寒さもある程度を越えたと痛 みに変わるという。こうなると生命 の危機まで感じられるものなのだろ う。寒さの程度そのものとしっかり と向き合った異色作である。
 はしやきたる犬の足あと雪の上に
 秋田市 富樫由美子

【評】雪を喜んでかけめぐった犬の 足あとを描いた。この足あとに、も はや今は不在になつてしまつた犬が しきりに思われるのである。
 ウイルスの変異きりなし去年今年
 東京都 野上 卓

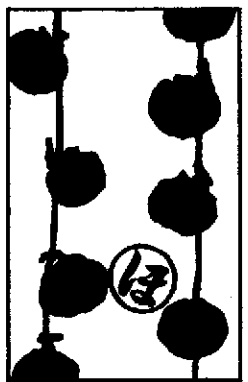
【評】新型コロナウイルスは次々と 変異を繰り返してきた、今年が去年 に変わる瞬間も、変異が起つてい るという。恐ろしいが真実だろう。 前籠に犬のる自転車枯野を来
 川口市 高橋まさお

屋上をひとりじめして日向ぼこ
 甲府市 村田 一広
 つらつら玄關の詐欺師に落ちよ
 東京都 佐藤 勝美
 クーラーボックスに鯛焼入れて父帰る
 仙台市 鎌田 魁
 二人掛ソファに三人クリスマス
 松原市 たろりずむ
 人形の瞳まっすぐ雪雉
 神戸市 遠藤 音々
 手でさぐり足でさぐつて炬燵猫
 川口市 清正 栄子

年間賞 俳句 ①

戦塵下キーウの地下に染脚
 【評】昨年はロシアがウクライナを 侵略した歴史的な年。それを冷静に 熱い思いを込め得た秀句である。
 首都キーウの地下壕に復活祭を祭
 家族。「染脚」は死から蘇ったキ リスタの象徴として祈りを込め、「キ ーウ」のウクライナ語で国家名を、 「戦塵下」で厳しい状況を正確に表 現している。誰もこれほどの句を作 れなかつた。脱帽の一句。(矢島渚男)

日へ雨へ背筋を立てる早苗かな
 宇都宮市 松広 訓
 【評】植えて幾日かたった早苗が すっかり根付き、すでに稲田の稲と して尖った葉先を天に向けて並んで いる。晴天の日も雨の日も、ゆらゆ らことなく真っ直ぐに伸びてゆく稲の 様子を「背筋を立てる」と擬人化し たところにも早苗への慈しみが感じ られる。刈り入れまでの時間を「日 へ雨へ」とした上も簡潔でいい。
 (宇多喜代子)



題字サイン・イラスト 福田美蘭